心身障害児の親子関係に関する研究

長　畑　正　道（筑波大学心身障害学系）

昭和５５年度よりの３年間の研究をふり返り，あわせて今後の研究の展望を行うことにする。

1.　初年度（昭和５５年度）の研究

心身障害児の親子関係をめぐる問題について，重い障害を持つ子どもの親子関係，および情緒障害，とくに登校拒否の親子関係について，症例検討も行いながら，社会病理との関連において把握しようと試みた。これまで障害問題はどんなに障害が重い子どもであってもはぐくみ育てて行こうとする母性原理によって大きく進展して来た。しかし，より合理的に子どもの発達を促そうとするとき，母性原理に加えて父性原理の導入が重要となる。とくに最近問題になることの多い登校拒否児の治療をめぐっては，此の世に生きて行く上での厳しさを父性の力によって子どもの身につけさせて行くことが重要であることが指摘される。

以上のように重い障害児の場合でも，情緒障害児の場合でも，母性原理に支えられながら，同時に父性原理のきびしさが同時に必要であることがうかがえる。

2.　昭和５６年度の研究

対象を心身障害児の中でもダウン症候群にしぼり，その家庭環境の状態をBradley and Colwell（1978）のＨＯＭＥ（Home Observation for Measurement of the Euvironment）を用いて調査した。ダウン症候群児の年令は生後４カ月より２３カ月，平均14.6カ月で，合計２０例について検討した。また同年令（平均12.3カ月）の正常対照児と比較した。ＨＯＭＥは６領域，全項目数４５で構成されている。得点率は全体としてみると正常対照児とダウン症候群児との間には特に差はみられなかった。しかし領域別にみると，Ｉ領域（母親の情緒的，言語的応答性）において，ダウン症候群児とくに１歳児において，正常対照児に比べ有意に得点が低かった。このＩ領域は，その後の知的発達と相関が大きいとされている領域であるが，母親を中心としたダウン症候群児に対するearly stimulation の問題と関連して考えると，母親のより一層の努力ならびに積極性が必要であることが判る。

3.　昭和５７年度の研究

心身障害児の親子関係も１つの対人関係である。そこで対人関係のあり方のより客観的な研究が重要となってくる。プレールーム内でセラピストと子どもがどのような位置関係をとることが多いかで対人関係を客観的に捉えようとした。正常児では１～２歳ではセラピストに最も近くいることが多いが，６～８歳では最も遠くに位置するようになり，９～１１歳では逆にセラピストに近づいてくることが明らかになった。また自閉症児および多動性脳障害児ではセラピストの近くに位置することが多いが，非多動性重度精神遅滞児では対人的距離に一定の傾向がなかった。こういった障害児と同年令の正常児ではセラピストより最も遠くにいることが多かった。以上の結果より心身障害児の親子関係を考えて行くとき，それぞれの障害児の特性を十分ふまえた上で親が子どもに接して行く必要があることが示唆された。

また対人接触は新生児期にすでにその萌芽がみられる。この意味で新生児期の行動を客観的に正しく把えることが重要である。生後１２時間から７２時間までtime lapse ＶＴＲでマット内での新生児の行動を連続して記録した。その結果生後１２時間より２４時間の間は頭を右に向けている時間が最も長く，また個体差も少かった。このことはcerebral asymmetry の１つのあらわれであり，かつこの時間帯がcerebral asymmetry の１つのsensitive period ではないかと考えられた。この意味でこの時期の新生児への言語的働きかけの問題について今後深く研究することが重要な課題であると考えられた。

5.　今後の課題

心身障害児の親子関係について，ことに障害の特性をふまえて，どのように接したらよいかを親

子でプレールームで過す状態を計測することが必要な課題である。また超早期療育を親子訓練の形で展開して行くにあたってはとくに重要である。また同じ障害であっても個体差が著しいので，この問題についても掘りさげる必要がある。

一方，新生児期の対人関係，ひいては親子関係の確立は重要な課題であるが，中でも親子のコミュニケーション，それも言語によるつながりが，どの時点をsensitive とするか決定して行く必要がある。これまでの研究で生後１２～２４時間の間が問題の時間として浮び上って来たが，この点について更に深く研究することが望まれる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

5.今後の課題

心身障害児の親子関係について,ことに障害の特性をふまえて,どのように接したらよいかを親子でプレールームで過す状態を計測することが必要な課題である。また超早期療育を親子訓練の形で展開して行くにあたってはとくに重要である。また同じ障害であっても個体差が著しいので,この問題についても掘りさげる必要がある。

一方,新生児期の対人関係,ひいては親子関係の確立は重要な課題であるが,中でも親子のコミュニケーション,それも言語によるつながりが,どの時点を sensitive とするか決定して行く必要がある。これまでの研究で生後 12～24 時間の間が問題の時間として浮び上って来たが,この点について更に深く研究することが望まれる。